

長期調査中間報告

ナースを対象にした日本人の疫学調査 JNHS—中間報告

群馬大学医学部保健学科医療基礎学 教授 林 邦彦

欧米諸国では、Nurses' Health Study, Women's Health Initiative Study-Observational, Million Women Study など大規模女性コホート研究が、女性の健康における数多くのエビデンスを提供している。これら観察的疫学研究は、特定の治療法評価の検証力ではランダム化臨床試験に劣るといわれるものの、日常生活習慣や各種の保健医療習慣を包括的に把握し、現実社会での治療法や予防法の影響を評価できるという大きな利点をもつ。わが国でも、リプロダクティブ・ヘルスや女性ホルモン剤の利用といった女性固有の健康問題でのエビデンスを提供すべく、「女性の生活習慣と健康に関する疫学研究：日本ナース・ヘルス研究 (Japan Nurses' Health Study, JNHS)」が開始された。

JNHS は、運営委員会、プロトコール委員会、データ解析委員会、疾病評価委員会、フォローアップ委員会、女性看護専門委員会、およびデータ・センターの各組織で運営され、また、研究の科学性・倫理性を監視する目的で外部評価委員会による定期的な評価を受けている。研究対象者の募集は、日本更年期医学会をはじめ、日本看護協会、47 都道府県看護協会などの協力、また、地域ブロック担当委員や各県担当委員の募集協力のもと、30 歳以上の女性看護師を対象として行われている。対象者は、まずベースライン調査として、属性、喫煙・運動・飲酒・食事といった生活習慣、身長・体重・血圧値・コレステロール値など検査値、初経・不妊歴・妊娠歴・出産歴・閉経状況といったリプロダクティブ・ヘルス関連事象、ホルモン補充療法など女性ホルモン剤の利用歴、各種疾患の既往や家族歴について自己記入式調査票に回答し、研究事務局まで返送する。女性ホルモン剤の調査項目では、同封した写真付薬剤リストに基づいて使用薬剤の特定を行う。ベースライン調査後、対象者は2年に1度、日常生活の変化や新規発生の疾患などについて継続追跡調査票に答えることで、10年間の追跡調査が行われる。

第一次対象者募集は、2001年10月から行われ、39,028人から有効回答を得ることができた。そのうち、追跡調査に書面にて同意した対象者は約9,000人であった。この第一次募集におけるベースライン調査でのホルモン補充療法の利用状況について、中間的な分析を行った。閉経後女性の割合は、30歳代で0.6%、40—44歳で3.4%、45—49歳で15.3%、50—54歳で60.7%、55—59歳で97.2%、60歳以上で96.5%であった。ホルモン補充療法使用歴は、30歳代で0.5%、40—44歳で1.4%、45—49歳で3.9%、50—54歳で8.5%、55—59歳で10.7%、60歳以上で9.6%であった。これらホルモン補充療法使用経験を有する女性について、エストロゲン単独・プロゲステロン併用の割合、エストリール・結合型経口エストロゲン・貼付型エストロゲンなどのエストロゲン種類など、その利用実態について中間集計結果を報告する。

JNHS は、追跡対象となるコホート員数が合計50,000人となることを目標規模としている。そのため、第二次対象者募集が、2002年11月から実施されている。2003年8月までに約3,000人の追加参加があり、累計12,000人のコホート規模となっている。現在も、対象者募集は続いている。2年に1度の自己記入式調査票による郵送調査に協力可能な医療機関や女性看護師をご存知の方は、JNHS 研究事務局 (FAX:027-220-8974, e-mail:eba@health.gunma-u.ac.jp, <http://jnhs.umin.jp>) まで、是非、連絡協力いただきたい。